

発行日 平成27年10月1日
発行者 NPO北丹沢山岳センター
事務局 神奈川県相模原市緑区小瀬1545-1
TEL042-687-4011
FAX042-687-3980
E-MAIL:kibatanzan@kib.biglobe.ne.jp

今回は西丹沢特集とします。

来春にはユージンロジが公募により再開されますが、本文は小本満さんの文書で池谷嘉徳さん編集の足柄乃文化第二八号二〇一年三月より転写させていただきました。

玄倉村 尊仏

蛭ヶ岳に薬師如来、不動の峯に不動明王、塔ノ岳に拘留孫仏を祀る玄倉川の源流一帯は立入が困難だったことから聖域の様に思われていた。

秦野市三廻部の孫仏山観音院の住職の話では、「孫仏山」の呼称は玄倉川源流のいくつかの峰を総称している

と伝えられると言うが、この名の起源を追求していくと

孫仏講の発展の歴史が浮んできそうである。

玄倉の人たちは、ユウジン沢へはかなり早くから入っていたようだ。悪場のない歩きやすい沢なので木地師が

奥まで早々と入っていたのをはじめ、支流といつても本

流らしい広さ、深さのある椋洞沢の上流ではザツコ獲り

と六方石採取が行われ、その拠点としてザツコ小屋が作

られていた。板を何枚も立て掛けただけの構造であった

がこれには理由がある。六畳敷きほどの広さで数名が泊

ることができた。

ザツコとは山椒魚のこと、ユウジン沢には神ノ川に比

べてはるかに多く棲んでいた。獲られたザツコは小屋の

中で燻製にされた。

燻す煙を排出させるために板を何枚か立て掛けたよう

な構造になっていた訳である。

この山椒魚の燻製は箱根湯本の土産物屋へ持ち込まれ

て箱根山椒魚の燻製として市場に出ている。

丹沢と災害



ユウジン休泊所の全景



関東大震災直後の西丹沢

大正十二年九月一日正午ちかく、相模湾を震源とする

巨大地震が南関東を襲って、丹沢全山を丸裸にした。

あらゆる山肌がすべり落ち、崩れ落ちた岩石は深い谷を

つぎつぎに埋めていった。

「富士山の右側に見えるあの山は、あんなに低いのに

いつも雪をかぶって真白だと子供の頃に話し合っていた

よ。「と千葉の一老人は昔の思い出を語っていたが、露

出した岩が雪のように輝き、狭い山頂や稜線だけがわ

ずかに樹木を残していた。関東大震災の被害はそれ程に

すぎましいものだった。

翌十三年一月十五日、丹沢を震源とする余震一相模湾

大地震がふたたび全山を揺がした。ひびわれの入ってい

た岩は忽ち崩れ落ちて、全山の沢筋に無数の滝が出現し

た。後年丹沢が沢歩きメツカとなる基礎がここに出来

上ったわけである。

二回の大地震は諸士平に壊滅的被害を与えた。すべて

の建築物は倒壊してしまい、製板所は再び立ち直ること

は出来なかったが、帝室御料林を管理する休泊所がその

任務を中断することはなかった。

堀立の仮小屋を建てて、自給自足のために妻を備いた

休泊所の番人小宮さん夫妻の生活は、救援の手が何時届

くかわからない希望のないものであった。すべての連絡

経路が不通になっていたばかりでなく、救援を行なう客

の都市が壊滅していたからである。それでも、何とかや

りくりして休泊所の仕事を続けたのは立派だった。

昭和三年七月末に一個の台風が八丈島付近に停滞し

た。東海地方に横たわっていた前線が刺激され、七月三

十日から八月一日まで猛烈な集中豪雨が玄倉川上流をお

そい、激流が深い谷を削り取っていた。

崖上の台地に展開していた諸士平休泊所の諸施設（宿

泊施設、農具小屋、苗小屋、苗圃など）は、その土台を

削り取られてつぎつぎに濁流に崩れ落ち、諸士平全体が

消滅してしまっただけでなく、

わづかに、いちばん山裾に寄った高みにあった尊仏詣

での径路が部分的に残ったが、それもすぐに洗い流され

てしまった。

この水害は、横浜気象台五十年史には記載されている

が、百年を記念して出版された「神奈川の気象」では、

被災住民がいないという理由で消されてしまった。

休泊所などの施設を隔てた向こう側に移るには、

新しい所在地名称が必要だった。当然のことながら現

地の責任者である小宮さんにも問い合わせがあったと考

えるべきである。小宮さんが新所在地の脇を流れる沢の

名を取って「ユウジン」と答えた時、「湧津」の文字を

思い浮べた筈である。それは、彼自身が何度となく登山

者に教えてきた名称であった。これで「ユウジン」の地名

が固定化され、「葦山の平」の旧称が消えたのである。

ユウジンの地名がない文献に見当たらないのは、命名

が新しいためであるかも知れない。